



えのもと、ひでたけ  
1966年、兵庫県生まれ。NPO法人トランジション・ジャパンおよびトランジション・藤野の共同創設者。イギリスに滞在していた07年、トランジション・タウン運動に出会う。08年夏に帰国後、生活拠点として遠くを歩き、県の藤野トランジション活動を仲間とともに立ち上げる。株式会社「トランジション」創設者兼CEO。

ここで約2年半を過ごした。そこで、直感に確信が変わった。「フインドホーンに住む人たちは皆、いきいきと暮らしていました。とはいえ、そこは半世紀近くをかけて今のカタチになったわけで、ピークオイル（石油生産の限界）や気候変動などグローバルな危機が問題となっている昨今、それほど悠長に構えている時間はないとも感じました」

そんな時、耳にしたのが、06年に英国南部の小さな港町トットネスで始まったトランジション運動だった。この運動を始めたのは、パーマカルチャーの考え方をまっすぐりに応用したロブ・ホプキンズという人物だ。

### 地域通貨「よろづ屋」 使いすぎ大歓迎

こうして08年秋、3人の立ち上げメンバーで「トランジション藤野」が発足した。「トランジション運動が成功するカギは、地元の住民や団体とどれだけ連携できるか。そこで僕たちは、地元で影響力をもつ人たちのところに個別で説明に伺ったり、既存の団体の活動に参加したり、協力したりして信頼を得ていくことから始めました」



縁側で談笑する住人の池竹さん（右）と小山さん。中央が榎本さん。Photos：高松英昭

## 里山長屋、地域通貨、森、電力をつくる。 日本でも広がる「トランジション・タウン」運動。 災害やエネルギー危機にも「底力」を発揮したい ——榎本 英剛さん



合板や接着剤を使わない昔ながらの工法で建てられた長屋

その傍ら、地元の人たちがもつ意欲やスキル、持ち物までも有機的につないでいく取り組みとして、昨年の春から「よろづ屋」という名の地域通貨も始めた。会員は初めに「中国語が話せる」「自転車の修理ができる」「お菓子がつくれる」など、自分が提供できるものを登録する。随時発生するニーズについては、メンバーリストを通じて「今〇〇にいるけど、誰か車で拾ってくれない？」などと呼びかけると、対応可能な人から「今から10分後に行くから待って」と返事がくる仕組みだ。現在150世帯が加入し、成約率も把握している範囲では7、8割と意外に高い。

報酬は当人同士の交渉で決める。貨幣は存在せず、互いの通帳に金額とサインを書き込むことでやり取りが成立する。「おかげで頼みになったことが気軽に頼めるようになったという声も聞きますし、今まで役に立たないと思っていた自分の特技が喜ばれたら、生きがいにもつながります。地域通貨は使ってなんぼ。『出費』が多い人は、地域の人が力を発揮する機会をそれだけたくさんつくった人でもあるんです」

メンバーリストは台風で通行止めが相次ぐ中、通行可能な道の情報を共有するなど、災害時のネットワークとしても力を発揮した。今では「とりあえず、よろづ屋のメンバーリストに流してみよう」が合言葉となるほど、よろづ屋のネットワークが藤野のトランジション運動を支えている。

トランジション藤野では、取り組みたいテーマがあれば誰でもワーキング・グループを立ち上げることができている。現在、「よろづ屋」を含めて10近いグループが活動している。

「たとえば昨年の夏、藤野にクマが出たことが一つのきっかけとなって、荒れた森を再生するために結成されたのが『森部』です。通常の間伐作業は林業の専門家にしかできませんが、森部では樹皮をむいた木を立ち枯れにさせる『皮むき間伐』を始めました。そうすることで、木は1年半後にそのまま建材としても使えるくらい乾燥した状態になる。切り出した木は驚くほど軽くて、女性や子どもでも運ぶことができます」

家や家具の材料として使えない端材は薪やペレットにすることで、地産地消のエネルギー源にもなる。

3月11日の東日本大震災に伴う原発事故以降、電力会社に頼らない暮らしを考えるために立ち上げたワーキング・グループもある。その名も「藤野電力」。「今はまだ自然エネルギーについての情報を収集したり、ソーラー発電をして



「森部」による皮むき伐採 写真提供：小山宮佳江

異なるシステムが混ざり合う場所（エッジ）で変化が起きる

建材は地元の杉やヒノキ。壁は、自分たちで割った竹を組んだ「竹小舞」の上に発酵させた土を塗った土壁。プロの指導を受けながら、住人たちが自分たちの手でつくり上げた長屋には4世帯が暮らしている。一番端には炊事場を備えた共有スペースがあり、必要に応じて、ここに置かれた洗濯機や冷蔵庫、お風呂もシェアすることができ。夏は風が吹き抜け、室内のほうが涼しくいらいだという。

これは化石燃料をできるだけ使わない暮らし方を提言するため、今年2月に完成した里山長屋。全国からも注目を集め、脱依存などをキーワードとする「トランジション藤野」を象徴する建物といえる。

この運動を始めたメンバーの一人である榎本英剛さんは、もともとコーピングというコミュニケーションの手法を教えていた。コーピングとは個人が本来もっている力を最大限に引き出すためのものです。でも、その人を取り巻く社会の仕組みが、人の力を生かそうとする仕組みになっていなければ、どこかに限界があることを感じていました」

そんな時、ふとしたきっかけでエコビレッジの存在を知った。「生活に必要なものやエネルギーを自分たちでつくれば、外の仕組みに依存しなくて済む。そうすれば、自分たちの暮らしを自分たちの力でつくるという人間の基本的な権利を、僕たち現代人も取り戻せるのではないか」

そう直感した榎本さんは、05年、エコビレッジ運動の旗振り役ともいえるスコットランドのフインドホーンに家族とともに移住し、そ



建設中の里山長屋。竹小舞の上に土を塗る 写真提供：小山宮佳江